

# 川崎医療福祉大学 同窓会報

創刊号

平成7年7月1日

川崎医療福祉大学  
同窓会



## 御 挨拶

学 長 江 草 安 彦

川崎医療福祉大学第1回の卒業証書ならびに学位記授与式を挙行してはや3ヵ月が経過しました。私は創設後の本学の4年間の取り組みを回顧し、感慨ひとしお深いものがあります。しかし、その感慨をふきとばすようにみなさんは力強く同窓会を発足させ、第1回の同窓会会報誌が発行されることになりました。若きことは素晴らしいこと、希望はすべての困難を解消するとの感を深めています。おめでとうございます。

わが川崎医療福祉大学は、国民生活のあり方の根本的な変化、すなわち構造改革の求められている今日、改革の第一線に立ち、医療・福祉・保健のあり方をより人間的で、より高次なものにするための専門職の育成をめざして発足し、4年が経ちました。おかげで研究、教育の両面

で所期の目的を達成してきているといえます。卒業生のみなさんは全国各地に、まるで宣教師がその信念を地の果てまで伝えるように、大きな役割を担って出発しました。

みなさんの今日の生活はいかがですか。必ずしも平坦な日々ではないと思います。いろいろな意味で行き詰まりを感じたり、失望したりすることもあるでしょう。失望、困難を解決した後のさわやかさ、充実感とはとても素晴らしいものです。あなた自身と、母校の後輩のために、力をふりしぼってがんばって下さい。道はあらかじめ用意されているものではありません。荒野を人々が歩き続けて道ができあがるのです。

みなさんが大きな志をもって毎日毎日を着実に解決していくことを心から希望して、同窓会発足にあたり、お慶びのご挨拶といたします。



## 柳は緑，花は紅

医療福祉学科長

小 田 憲 三

卒業生の皆様，お元気ですか？

開学以来4度目の春が巡ってきて，皆様方が卒業されて，早や3ヵ月有余が経っています。それぞれの巣立ったところでの定着を，心から願い，かつ祈り上げております。

日本の春夏秋冬という季節は，彩りと情感のうえにおいて，私共を魅惑させ，そこに浸らせる趣きが豊かにあります。これは人生航路にもたとえられることは，皆様もよくご存知のところでしょう。

そのようななかにあって，江戸時代頃からいわれている一つに「柳は緑，花は紅」というものもあります。

柳は江戸初期には，日本のかなり多くのところで見られる木であったようです。古くさかのばれば，遣唐使がその独特の雰囲気誘われて，当時の中国から持ち帰ってきて以来，少しづつ増え，今や全く風物誌として定まっています。昭和30年代に，柳のルーツとされる揚子江中流地域へ，日本の植物学者が調査に出かけましたが，特定化できなかったとされています。

柳の緑も美しいものですが，自然に逆うことなく，右に左にたなびく姿は，何か人智を超えた生命の流れを教えてくれるようです。花は紅という言葉と組み合わせると，それぞれの持ち味を生かしながら，一つの世界観を呈示しているともいえます。自然の理というのづしょうか，「焦らず，休まず」に生きていくことの大切さを，私共に教えてくれているようです。

やがて初夏です。皆様の心も，また年輪を重ねて，生活も燃える季節がやってきます。

その時にもまた，「柳は緑，花は紅」という人生の初々しさを持ち続けていただきたいと願っています。さらなるご発展を願い上げつつ，まずはこの言葉を送らせていただきます。



医療技術学部長

上 田 智

川崎医療福祉大学は1991年に開学した医療 (medicine) を基盤とした健康 (health) と福祉 (welfare) を統合し研究および教育し学問的体系化を探究する目的で創設された大学であります。この大学に学ぶ者として新領域の開拓者としての誇りと自信をもって社会に巣立っていった卒業生の皆様の今後の活躍に大いなる期待を抱いております。

学生時代に輪読会で諸君とともに読んだ“知の技法”の中に書かれていたことをもう一度思い浮かべて頂きたい。将来どんな専門領域で活躍することになるにせよ，かならず身につけておかなければならないきわめて基本的な知の技法とは，問題の立て方，認識の方法，論文の書き方，発表の仕方であると。

知とは行為であり，その行為は他のコミュニケーションであり，現象をいかにリクエイティブに認識するかにあるという事など多くの発見をこの書物から得たことを思い出しております。

社会は諸君に何を期待しているか，それは社会の指導的役割を担う人材に成長することを望んでおります。大学では学問することの楽しさを体験して頂きました。その楽しさを通じて自信を持ち積極的に何事にも取り組む姿勢を身に付けて頂きました。これが生涯学習のエネルギー源となった筈です。卒業後の如何が将来の諸君の道を決定的にするものだと考えております。

6月3日からインドネシアのジャカルタを訪問しましたが，首都だけあって人口はまさに1千万人にならんとしております。都心部の道路の混雑ぶりは大都会の共通した悩みようです。しかし一つ賢明な方法であると感じたことは，都心部を貫いている2本の幹線自動車道に信号がないことです。車は信号なしで郊外まで直進できますが，左右の横方向に向かえときの不自由なことは想像以上のものです。ガソリン代が

日本の1/4の値段であるため政府はガソリンを余分に無駄使いさせるためこのような道路行政を行なったのだと腹立ちまぎれに日本の商社マンが説明しておりました。

インドネシア国立大学の医学部付属病院を訪問しましたが、本館の建物はオランダ統治時代の立派な佇まいで、大切に管理されている様子が伺われ立派に病院として機能しておりました。サラセミアの患者の治療センターと喘息センターを見学しましたが、インドネシアの子供達も喘息に悩まされており、郊外への転地療法の話聞くことができました。

貧富の差の大きい国ですが、発展途上国として国づくりのエネルギーを強く感じました。日

本からの資金が随分つき込まれており、日本の若い男性、女性が活躍しており、現地人との交流も人種的差別なく自然に行われている様子には好感がもてました。ホテルのロビーでヨーロッパやアメリカとは違う雰囲気であつろげたのは、ホテル内の人々がすべて黒い髪の人ばかりであったせいかもしれません。

日本はインドネシアから期待されている国の一つであると強く感じました。

今やインターネットの時代です。居ながらにして世界の情報のみを選択し、適切な判断を導き出し、創造的な仕事が誰でも望めば可能になる時代がやってきました。

諸君のますますの御活躍を期待しております。

## 同 窓 生 の 声

医療情報学科 録 田 安津子

楽しかった学生生活が終わり、4月に社会人の仲間入りをしてから、もう2ヵ月が過ぎようとしている。この3ヵ月間、息のつく間もなくただがむしゃらに次から次へと新しい事を吸収してきた。そして駆け足で日々が過ぎ去っていったような気がする。

私が勤務している百十四銀行システム部は、高松市の中心街から車で10分ぐらゐのところにある。業務内容は、営業店の端末機やATMの監視、公共料金の自動振替、営業店に還元される取引明細表をはじめとする各種資料の印刷など、銀行コンピュータシステムの運営、管理全体に渡っている。

現在私は、これから仕事をしていく上での前段階、つまり、研修中の身である。6月末までは、講師に授業形式で教えてもらいながら仕事内容を覚えている。まるで、仕事をしている人達の中に学生が混じっているという感じである。しかし、この2ヵ月間を通して、学生と社会人という立場は全然違うということをもつて

感じた。仕事をする上での社会人としてのマナー、例えば、電話応対、挨拶の仕方、上司への報告など、当たり前なのが当たり前でできるという事がこんなにも難しいとは思ってもみなかった。先日、電話応対で、相手の用件をメモしていた時の事だが、言葉が聞き取れなくて、すべてを聞き取る前に話が終わってしまった。その時は、頭の中が真っ白になって、何回も聞いてしまうという失敗をして、結構落ち込んでいた。しかし、日頃厳しい上司に「よく頑張ってるな。」と言われ、その一言で、それまでの嫌な思いすべてが取り除かれたような気さえた。

さて、仕事柄、学生時代の勉強が役に立つはずなのだが、幸や不幸か社会勉強(?)に趣をおいて、主たる勉強をほとんどしなかった私にとって、また0からのスタートとなった。スタートラインは横一線(もうすでに落ちこぼれかけてはいるが)、これからは勝負と肝に銘じて努力していきたい。そして、学生時代に取れなかった資格に再度挑戦するなど、自己啓発を行っていこうと思っている。

## 医療情報学科 品川佳満

就職してあったという間に3ヵ月が過ぎてしまいました。就職してからの1週間は何もかもが初めてのことで、かなりの戸惑いを感じました。電話での応対の仕方、患者さんとの接し方、また同じ職場の人の名前を覚えることでさえ大変でした。そのため最初の1, 2週間は精神的に疲れて家に帰っても食事をしたらすぐに寝てしまう毎日でした。

でも、1番戸惑いを感じたことは、やはりコンピュータのことでした。情報学科を卒業したところことで少しはコンピュータに関して自信があったのですが全く学生の時とは違う機械、アプリケーションでのシステム開発に一気に自信をなくしてしまいました。これから、お金をもらってこのコンピュータをさわると思うとさらにプレッシャーを感じました。学生の時とは違ってもう見せかけは通じません。1行1行のプログラムにも真剣かつ慎重に取り組まなければなりません。全く学生の時のことが役に立っていない訳ではありません。むしろ私にとっては役に立っていることの方が多いかもしれませんが、ほとんど一から勉強のやり直しです。また

就職した場所が病院ということもあって医療面での専門的な知識が必要なこともあり、大学ではほとんど医療のことを学習していないため、これも一からの勉強が必要でした。

仕事の面だけでなく生活面でも学生の頃とは全く変わりました。朝起きることさえも最初の頃は大変でした。また自分の時間が学生の時ほど持てなくなりました。しかし、無駄な時間を過ごすことが少なくなり今は充実した毎日が送れていると思います。金銭面に関しては充実しているとはいえませんが何とか生活しています。

2ヵ月過ぎた今、毎日が勉強の積み重ねです。正直いって今は仕事が楽しいというよりむしろ、しんどいという気持ちの方が強いです。自分の知識の少なさと勉強不足であるということをつくづく感じています。しかし、この勉強の積み重ねがこれから自分のためになると思っています。また一日も早く仕事を覚えて病院の役に立ちたいとがんばっています。

最後に私の勤めている岡山市西大寺にある岡村一心堂病院は平成7年6月1日より内科は365日診察しているので具合が悪くなったらいつでも来て下さい。

## 編 集 後 記

同窓生の皆様いかがお過ごしでしょうか。自分の道をしっかりと歩んでおられ、各分野の第一線でご活躍されていることだと思います。

さて、同窓会の発足にあたり、皆様の間をつなげたり、母校の近況報告をお伝えすることを目的とし、この度同窓会会報誌を発行することになりました。発行にあたりまして、江草学長をはじめとする諸先生方や同窓生の皆様、学生課の職員の方々のご協力があったからこそ発行出来たことを深く感謝いたします。

なお、会報誌は皆様で作成していくものでございますので、学科・友人間への伝言や感想等がございましたら、同窓会室・会報誌発行係までご連絡して下さいますようお願いいたします。

今後とも川崎医療福祉大学同窓会・同窓会会報誌をよろしく願います。

山下晃史  
的場康子

